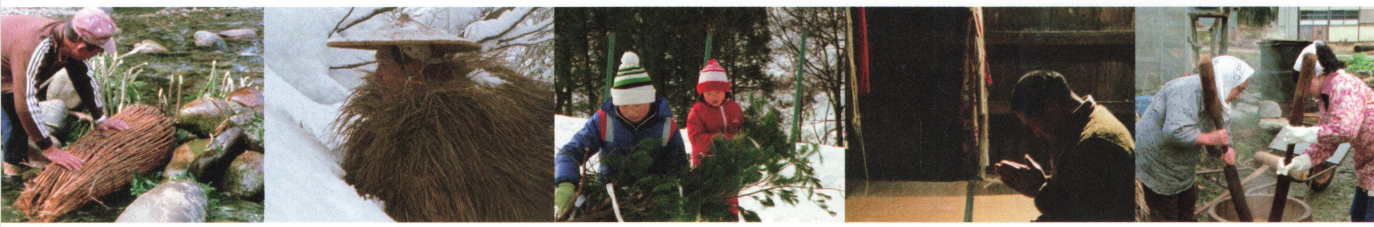
山に寄り添う生活をまるごと残そうとした、記録映画の金字塔。

デジタルリマスター版

越後奥三面（おくみおもて）

―― 山に生かされた日々 ――



昭和の終わりまで、新潟県の最奥に奇跡のように残されていた山村＜奥三面（おくみおもて）＞
人々は山に生かされ、山を支えにして暮らしてきた。
その最後の姿が、40年の時を経てよみがえる。

1984年優秀映画鑑賞会特薦／1984年日本映画ペンクラブ特別推薦／1984年度日本映画ペンクラブノンシアトリカル部門第1位／
1984年キネマ旬報文化映画ベストテン2位／1986年シカゴ国際映画祭ドキュメンタリー部門銀賞

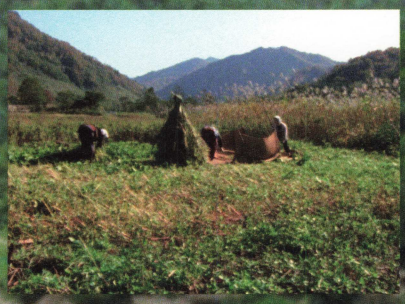
民族文化映像研究所 作品

1984年｜デジタルリマスター:2023年｜145分｜カラー｜4:3

https://minneiken.wixsite.com/okumiomote

ケモノの狩り、川魚の漁、山菜やキノコの採集、田畑の耕作……
ダムに沈むまで、ここには山に生かされた日本人のくらしのすべてがあった

新潟県の北部、朝日連峰の懐深くに位置する奥三面（おくみおもて）。人々は山にとりつき、山の恵みを受けて暮らしつづけてきた。冬、深い雪におおわれた山では、ウサギなどの小動物、そして熊を狩る。春には山菜採りが始まる。特にゼンマイ採りは家族総出で働き、戦争とよぶほど忙しい。それに慶長 2 年（1597 年）の記録が残る古い田での田植え。奥三面は縄文時代から人の住む歴史の古い村でもある。夏は、かつて焼畑の季節だった。川では仕掛けやヤスでサケ・マス・イワナを捕らえる。秋には、木の実やキノコ採り。そして仕掛けや鉄砲による熊狩りが行われる。
「山、山、山……。幾多の恩恵、心の支え……山しかねぇな、山の暮らししかねぇなぁ」とある村人は言う。人々は 3 万 ha に及ぶ広大な山地をくまなく利用して生きてきた。



その奥三面がダムの底に沈む―
記録スタッフは、ダム建設による閉村を前に、一軒の家と畑を借り、山の四季に見事に対応した奥三面の生活を追いはじめた。

40 年前まで確かに存在した山の暮らし。
その喪失と記録が現代に問いかける

日本を代表する記録映画作家・映像民俗学者の姫田忠義ひきいる民族文化映像研究所が、1980 年から 4 年をかけて撮影。昭和の終わりまで自然に寄り添う暮らしをつづけてきた村の最後の姿を、まるごとフィルムで残そうという執念により、世界にも類を見ない記録映画となった。長らく公開の機会が限られていたが、姫田の没後 10 年となる 2023 年にデジタルリマスターが完成。高精細の映像と音響により、二度と撮影することができない人類の遺産ともいえる本作がよみがえった。

姫田忠義（ひめだ ただよし）

1928 年兵庫県神戸市生まれ。1954 年に民俗学者の故・宮本常一と出会い、その影響を受けて日本全国を歩き始める。1976 年に伊藤碩男、小泉修吉とともに民族文化映像研究所（民映研）を創立し、日本人が長い歴史の中で培った自然との深い対応と共生の姿を「基層文化」と捉えて研究を開始。フィルム作品 119 本、ビデオ作品 150 本にのぼる膨大な記録映画を残した。2013 年 7 月 29 日に 84 歳で死去。代表作に『アイヌの結婚式』『イヨマンテ』など。89 年にフランス政府より芸術文化勲章オフィシエ叙勲。

『越後奥三面―山に生かされた日々』

1984 年 | デジタルリマスター：2023 年 | 145 分 | 日本 | カラー | 4:3 | モノラル | 16 ㎜→DCP

スタッフ
姫田忠義・小泉修吉・伊藤碩男・澤幡正範・中川邦彦・鈴木正義・西別府出・田口洋美・小原信之・山本則子・伊藤琴・千葉寛・堀田泰寛・渕上拳

協力
奥三面の文化財保存を進める会・新潟県朝日村・財団法人トヨタ財団

デジタルリマスター版
フィルムスキャニング／カラーコレクション：アテネ・フランセ文化センター
監修：小原信之・姫田蘭
進行：今井友樹・遠藤協
クラウド・ファンディング：Motion Gallery

デザイン：岩井友子　　配給協力：三叉路フィルム

企画・制作・配給：民族文化映像研究所

4月27日(土)より
ポレポレ東中野にて
ロードショー！ 全国順次公開

ポレポレ東中野
03 3371 0088　pole2.co.jp
JR東中野駅西口改札北側出口より徒歩1分
都営大江戸線A1出口より徒歩1分